

「昼夜をいとわず、体を動かして困っている患者を助ける」とは、1952年に光生病院（岡山市北区厚生町）を開設した故・佐能正がよく口にした言葉だ。父は、大東亜戦争に徴兵されフィリピン・マニラで全滅した部隊よりただ一人生還した人間であり、その生きざまはすごかった。

救急医療では、行き倒れであろうが重傷であろうが、絶対断らず平等に先進の医療に心がけていた。そんな姿勢が影響したのか当時の岡山では救急の「たらい回し」など全くなかったし、現在の岡山市の中核病院が24時間体制で救急医療を行う基になったのだろう。

同市北区御津地区に特別養護老人ホームを開設した時も、こんな言葉を残していた。「死んでいった戦友の代わりに親孝行をしたい」と。多くの方が賛同し、ボランティアで支えてくださった。約40年前の話である。経済的にも国際的にも沈みかけている日本に、時代は今、もう一度そんな医療を求めているようだ。

父から学んだこと

公益法人改革の中、2008年に社会医療法人という制度が生まれた。厚生労働省のいう5事業（救急、へき地、災害、小児救急、周産期医療）など、公的な仕事を請け負う民間病院のことだ。岡山県内でも既に、当院を含む8法人が認定されている。医療から介護まで切れ目のないサービスが求められる現在、地域の救急医療や在宅医療介護に向けた拠点として期待されている。

「もうかる医療は人にまかせて、底辺の医療を支え、十分に明るくはないが、困っている人の足を照らしてあげたい」。そんな一心で医師の誇りを懸けた父の医療に、今更ながら頭が下がる。

光生病院理事長
兼院長
佐能 量雄



◇筆者紹介（さのう・かずお）東京慈恵会医科大学 会医科大卒。岡山山医学部 附属病院などに勤め1992年から光生病院理事長兼院長、96〜2010年は理事長専任。岡山県病院協会専務理事、全国公私病院連盟専務理事、日本医療法人協会常務理事、全日本病院協会理事。専門は外科。岡山市在住。59歳。

一日一題

2012.2.2